



「子育てに学ぶ一模倣」

我が子が幼かった頃、私が扇風機のスイッチを足の指で止めたところ、それを見ていた我が子がそっくり全く同じことをして愕然としたことがありました。『なんでそんなこと真似するの〜』と思いつつも、私はその時思い出していました。そうそう、幼児は何でも【真似】して自分を成長させるのだった、と。

《立って歩く事》も《話す事》も真似して身につけるという事を知ったのは、こどものことを学び始めて間もない頃でした。私は《立つ》という行為は動物のように自然に備わった能力で、人間はただゆっくりにはしか開花しないのだと思っていました。ところがこどもは《立つ》ことを真似して身につけるのであって、真似する対象がなかったら立ったり話したりできないというのです。そういえば過去に狼に育てられたと思われるこどもが見つかった時、その子はまるで狼のような生態で、立って話すことができなかったことを思い出しました。

赤ちゃんは自分の周りで繰り返される人間の営みの様子をそっくりそのまま写し取り、直立歩行という技能を身につけます。その力は【模倣】とよばれ、誕生と共に持って生まれた能力で、幼児期のこどもの学び方となります。言葉を覚えるのもまわりにその言語があるからで、まわりに言葉や人間としてのコミュニケーションがなかったら言葉を身につけることができないのです。日本語を話す環境にいれば日本語を話せるようになるという事は当たり前すぎて、それを赤ちゃんがどのようにして習得するかという事はそれまで考えてもみませんでした。

真似して身につけていくというのは幼児期の学びの基本的な姿勢です。一方、大人は真似する時その事を意識できますが、こどもは意識できません。すべてを飲み込みます。もしそこに取舍選択があったら、『いつまでも世話してほしいから立たないことにする』という事になるかもしれませんが、『自分はドイツ語を話したいから今は真似しない』と思うかもしれませんが、逆に選ぶ能力がまだ育っていないからこそ、そっくりそのまま身につけることができるとも言えます。だからこどもは真似してほしくないことも真似します。あの扇風機のスイッチのように。そしてなんとそれを何の悪気もなく何度も繰り返してやってみるのです。はあ〜、とため息が出ます。

こういう学び方をしている幼い子の周りには私たちが一体どうしたら良いのでしょうか。そうです、大人は良い手本になるしかないのです。真似されても良い行動をとることです。なんと難しい課題でしょうか。大人なら人間として成熟していれば良くない言葉や行動を真似することはないと思います。ところがこどもは大人をしっかり見ていて、なんでも真似してしまうのです。

その上、人間の振る舞いの中にはその人のあり様が映し出され道徳的な要素が入ります。温かさ、厳しさ、誠実さ、真実、美しさ、冷たさ、醜、残酷さ等々行為だけでなく、そこにその人全体が映し出されるのです。この事実はできたら除外したかったくらいです。

私はこの恐ろしい法則を知って、自分のあり様を常に意識しなくてはいけない、自分を人間として精進させなくてはいけないのだと思い知りました。そのことはもちろんすぐにはできませんしとても遠い道のりでしたが、この幼い存在が私を見本としているのだと思うと身の引き締まる思いでした。そしてとても有難い存在だと感謝し、一緒に成長していきたいと思ったのでした。

(シュタイナーようちえん メルヘンこども園 教師 田上恵子)

